



中国革命史の表舞台「天安門広場」



毛沢東の肖像画が掲げられた「天安門」



歴代皇帝が君臨し続けた壮大な宮殿「故宮博物院」

世界的規模を誇る天安門広場は、1989年の天安門事件の舞台になったことでも有名です。東西500m、南北880mにわたって広がる40万m²の広場は、あまりに広大なため、点在する人民英雄記念碑、毛主席記念堂、人民大会堂、中国

国家博物館など、歴史的背景をもつ見どころをくまなく見て回るには、相当の体力を要します。まずは、毛沢東の肖像画が掲げられた天安門へ向かい、記念撮影を。

天安門をくぐってそのまま北上すると故宮博

物院のお出まし。面積 72万m²という広大な敷地に、9000 室もの部屋がひしめく紫禁城(故宮)は、明の成祖永楽帝が築きあげ、清朝最後の皇帝宣統帝(溥儀)が退位するまでの 500 年近くの間、24 人もの皇帝が君臨し続けてきたという、世界最大規模の宮殿です。入口にあたる南口の午門から北口の神武門まではほぼ 1km あり、一直線に並ぶ建物だけを見て歩いたとしてもゆうに 2 時間くらいかかってしまいます。

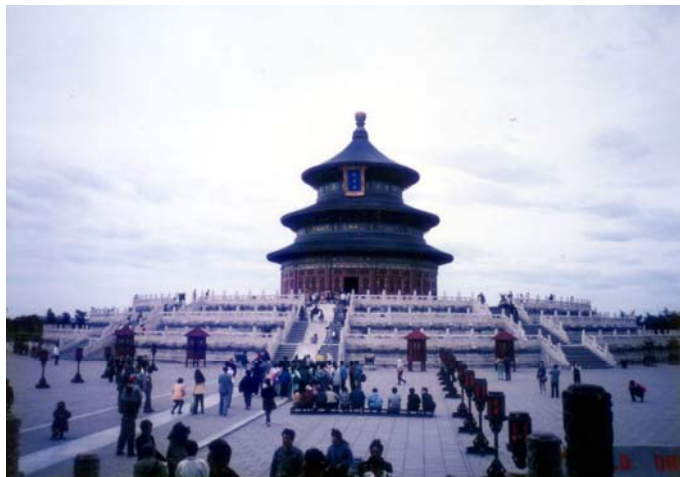
故宮と並んで北京のシンボリック的存在であるのが天壇公園。ここは明、清代の歴代皇帝が五穀豊穡を祈願したという祭壇で、総敷地面積は故宮をしのぎます。3 層の白い大理石の基壇の上にそびえ立つ祈年殿は、釘や梁が使われていない木造建築で、天安門と並ぶ北京の代表的建築物です。

初回の北京の市内観光は定番スポットコースだけでしたが、2 回目に訪れた時は日程的にゆとりがあり、昆明湖に面して多くの楼閣が点在する頤和園、欧風建築の粋を散りばめた庭園の円明園、白檀の一木造りの弥勒像が見もののチベット仏教寺院雍和宮、北京天文館(古鶴象台)や魯迅博物館・魯迅故居などを見学しました。ちょうど見学時が中国現代文学を代表する文学者魯迅の死後 60 年目(1936 年 10 月 15 日死去)

であったため、魯迅博物館・魯迅故居の入館料は無料でした。また、北京随一のショッピング街である王府井大街を散策しました。ここは巨大なデパートがひしめきおしゃれなショップが軒を連ねる一方、路地に入れば下町風情あふれる屋台街が出現し、街そのものを見て回るのも楽しかったです。

北京の夜は 2 度とも、北京前門建国飯店の広々としたロビーの脇にある梨園劇場で中国の伝統芸能である京劇を鑑賞し、ディナーは北京ダックの名店中の名店である金聚徳烤鴨店でこんがり焼きたての絶品の北京ダックを 1 羽丸ごとオーダー。パリッと香ばしい皮とジューシーな脂身、ネギ、甘味噌を荷叶餅にのせたら、くるくる巻いて甘い味噌ダレを付けて、パクリ。ベリーゲー！

郊外エリアの観光といえば、万里の長城と明十三陵。今から二千数百年も昔の春秋戦国時代、北方異民族の侵入を防ぐために各地に群雄していた国々が独自の城壁を築いていたといわれます。それを、紀元前 221 年に中国を統一した秦の始皇帝がつないで完成させたのが万里の長城で、山海関から嘉峪関までの 6350km もある長大な建造物です。その後も歴代の皇帝が修復を繰り返してはきましたが、やがて朽ち果て、往年



北京のシンボルともいえる天壇公園内の「祈年殿」



今や国劇とまでいわれる京劇



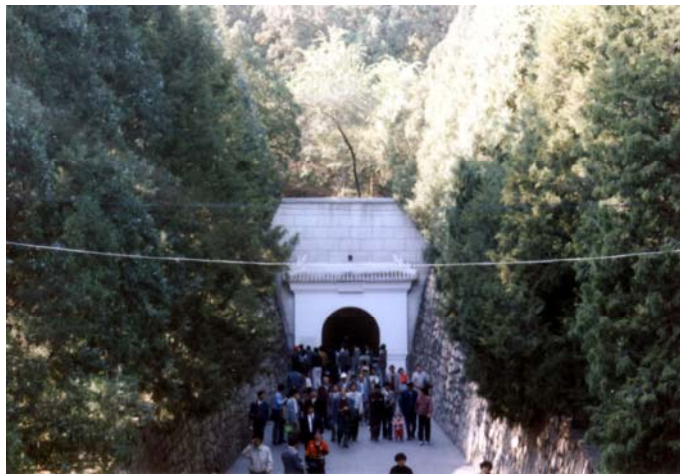
パリパリ&ジュワ〜の2段攻撃「北京ダック」



北京ダックと対照的な驚愕料理，蠍のフライにトライ



遥かなる「万里の長城」



明の14代万曆帝の眠る「定陵」の出口

の雄姿を眺めることのできる場所も限られてしまいました。現在は修復がかなり進んでいるようですが、当時は観光客が歩ける範囲は短かったです。それでも険しい山々に連なる長城が遥か遠くへと続く風景は、観光客の目を楽しませてくれました。

明十三陵へは、万里の長城から車で30分程度。天寿山麓にある明十三陵は、約40km²の敷地内に明の3代皇帝の永楽帝の長陵から17代の崇禎帝の思陵まで、13皇帝の陵墓が山裾に点

在しています。公開されているのは、永楽帝と皇后が眠る長陵、13代の隆慶帝の眠る昭陵、14代の万曆帝の眠る定陵の3カ所で、6年の歳月をかけて造営されたという定陵は地下宮殿も発掘され、万曆帝と2人の皇后の棺(複製)や玉座などが展示されています。

1994年にはシルクロードの東の起点として繁栄した古都で、現在は陝西省の省都である西安を訪れました。「西方を安ずる」という意味をもつ西安の名は明代に名付けられたもので、そ



「秦始皇帝兵馬俑博物館」の外観



8000 体もの陶製の兵馬俑が隊列を作る様は圧巻

れまでは紀元前 202 年に興った前漢から長安の名で呼ばれており、栄華を極めた唐代には西方の外国人で賑わう大都市へと発展しました。歴代王朝の都として華々しい歴史の舞台であり続けてきた古都西安は、秦の始皇帝や前漢の武帝、楊貴妃、李白など、日本人にもなじみの歴史上の人物のほか、数々の物語を輩出した街としても知られます。日本と西安との交流の歴史も古く、遣隋使や遣唐使が送られ、日本文化に大きな影響を与えました。

西安随一の観光名所は、何といたっても秦の始

皇帝ゆかりの秦始皇帝兵馬俑博物館です。秦始皇帝陵の近くにある兵馬俑坑には、2200 年の歳月を経て蘇った 8000 体にもおよぶ兵士たちが、中国初代皇帝の死後の生活を守っています。射手や騎兵、戦車兵、歩兵、馬と、8000 体もの陶製の兵馬俑が隊列を作る様は圧巻です。なかでも秦始皇帝兵馬俑博物館に3つある坑の一つ 1 号坑は必見で、始皇帝の陵墓を守るために作られたという平均身長 180cm もの兵馬俑が整然と並んでいます。秦代の男性の平均身長は 155cm 程度といわれており、当時の軍隊の強さを誇示



多彩な表情の陶俑が整然と並ぶ



参道の両脇には石像がズラリ並ぶ「乾陵」

するため、大きめに作られていたとされます。2号坑は新たな発掘現場で、これら大規模な素焼きの軍隊の発掘は、考古学者らによって精力的に進められていました。

中国広しといえども、西安ほど歴史遺産に恵まれた街は珍しく、秦始皇帝兵馬俑博物館のほか、皇帝に在位した年数と同じく37年を費やして造られた秦の始皇帝が眠る世界最大の地下陵墓である秦始皇帝陵、玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスの舞台となった華清池(2人専用の浴槽)、美しい文字が刻まれた玄宗皇帝自筆の石碑が見物の碑林博物館、中国の歴史上夫婦が同じ墓に葬られているのは極めて稀とされる皇帝夫婦(唐の3代皇帝の高宗と皇后の武則天)が眠る乾陵、玄奘(『西遊記』で知られる三蔵法師)がイ

ンドから持ち帰った教典を収めた大雁塔などが点在しており、それらを観光しました。ディナーは名物料理の西安餃子を。一つ一つの形や味わいに特徴のある餃子が種類豊富に揃い、小鳥や金魚などに似せて作った餃子は色も形も美しく食べるのがもったいないくらいでした。

1996年の10月に学術交流団の一員として訪ねた長春は、1932年に關東軍が清のラストエンペラー溥儀を担ぎ上げ、満州国を打ち立てた地です。その際、長春を首都とし、新京と改称しました。以後、日本によって大規模な都市計画が進められ、主要な建物や広場、道路などが整備されました。吉林省の省都でもある現在は、全国から優秀な学生が集まる学園都市としても知られます。



旧満州国皇帝溥儀の使用品などを展示している「吉林省博物館」



日本が建設した旧満州国国務機関

長春の市内観光は1日でしたが、溥儀が暮らした満州国の仮宮殿である偽満皇宮(吉林省博物館)、日本の国会議事堂を模して建造された満州国時代の最高行政機関であった偽満州国務院、映画製作の工程を見学できる長春電影制片廠、長春市内で一番大きなデパートである長春百貨大樓を訪れました。

それでは、僭越ながら私の学术交流報告書(抜粋；一部改変)で、今から12年前を振り返ってみます。

【平成8年10月13日～20日、白求恩医科大学学术交流団の一員として中華人民共和国長春市および北京市に出張して参りました。今年の団員は、医師3名、看護師長1名、事務職1名の5人で、例年に比べて少人数であり、しかも平均年齢が42歳と非常に若いメンバー構成です。また、私を含めて団員の医師全員が医学部の同窓生でした。

今回残念なことは、白求恩医科大学の学長が不在でお会いできなかったことですが、代わりに



白求恩医科大学の本館



学祖 Dr. Nerman Bethune の像

私たちを出迎えてくださった副学長が 30 歳代であったことには驚きました。また、今回の訪問団を世話していただいた白求恩医科大学国際

合作處の担当者、通訳、病院スタッフの皆さんは、私たちと同世代の戦争経験のない方々ばかりでした。奇しくもこの度は、来る 21 世紀に向かって萌芽世代同志による日中交流の感があり、医学はもとより、文化や思想など多岐にわたって非常に有意義な経験をしました。特に、今年大学を卒業し、国際合作處に勤務した通訳の方との深夜までに及ぶディスカッションは、酒の勢いもあり、お互いの日中観の相違などを忌憚なく語り合えて、大変興味深いものでした。(中略)

私の学術交流は、10月14日に団員全員での白求恩医科大学(本部、基礎医学院、大学図書館)、第一医院、第二医院、中国聯誼医院の見学と、10月15日に中国聯誼医院臨床検査部において、午前中は各検査室の見学と臨床検査技師の方々との意見交換、午後は臨床病理医と臨床検査技師の方々を対象にした学術講演を2題行いました。学術講演の内容は、炎症マーカーの最新の知見と免疫グロブリンの検査についてであり、各演題を1時間程度で講演しました。特に、後者は日常の免疫グロブリン検査を中心とした免疫グロブリン異常症の診断に関するものであったためか活発な質疑応答となりました。私の通訳は他の団員の通訳の方々とは異なり大学院生(他の方々は社会人)であり、現在勉強中



白求恩医科大学の第一医院



白求恩医科大学の第二医院



第三医院である中国联谊医院

のためか事前の打ち合わせにおいて講演内容以外の質問も多く、熱心さや勤勉さを強く感じ、頭がさがる思いでした。

臨床検査部は、各検査室のスペースが広くて羨ましい限りです。しかし、広い部屋の隅に故橋本龍太郎元首相より贈呈された高価な自動分析機器が平日にもかかわらず埃除けの布を被せたまま置かれており、中央にある机で数名の技師が手作業で検査を行っているのには驚きました。日本の多くの臨床検査施設ではメーカーの提供する試薬を何不自由なく使って検査をしているのに対し、機器用の試薬が入手しづらい中国の流通事情を垣間見ました。これでは臨床検査に対して「仏を作って、魂入れず」の感も否めません。しかしながら、中国では医師が診断のために必要とする最低限の検査は行えるということなので、日本のような過剰なる検査項目は「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」の感もあり、聊か疑問を抱きました。

最後に、この度の学術交流で気付いたこと、ならびに今後への提言を述べます。第一は、学術交流が主であるにもかかわらず、観光日程が多すぎることです。(中略)

第二は、白求恩医科大学図書館の建物は立派でも書籍が少なく、しかも最新の書籍が殆どないことです。各医院でも同様でした。大学図書館には英語と日本語の書棚があり、日本語の書棚には他医科大学の学内誌が数誌あるのにもかかわらず、本学の学内誌はありませんでした。また、1988年に出版された医学図書が最新のものでした。本学は白求恩医科大学と最も古くからお付き合いしているにもかかわらず、学術交流以外の文化的援助が劣っているように感じます。毎回団員が持参する土産物を何にするか考えるより、日本の最新の医学出版物を定期的に寄贈する方が喜ばれるに違いありません。中国聯誼医院臨床検査部での交流後、私は臨床検査

技師の皆さんから「よろしければ日本の最新の臨床検査に関する本を送ってください」と頼まれました。私と看護師長の2人が中国聯誼医院で学術交流を行いました。看護師長も私と同様に看護に関する本を依頼されたとのことで、帰国するや2人で中国聯誼医院に書籍を送ったところ、すぐさま中国から感謝感激の礼状が届きました。今後も学術交流を続けるのであるのだから、土産物持参と学術講演に限らず、平素より行える学術的支援についても検討していただきたい。

この度のメンバーは平均年齢42歳の若人で構成されていたため、スケジュール、気候、暴飲暴食などで体調を崩した者はいませんでした。初日は早朝成田発で同夜遅くに北京から長春へのフライト、10月中旬の長春の朝夕は気温が氷点下、長春滞在3日間での昼夜計5回の熱烈なる歓迎会など、全ての面でハードでした。今後は観光日程を若干削り、もう少し余裕のある移動、長春の気候を考慮すれば9月上旬の訪中、長春滞在中の歓迎会はせめて夜のみとし、多くとも3回までが望ましいと考えます。また、出迎え側の中国では若い世代の方々が多くなってきているので、本学訪問団の団員選考にあたり、今後とも引き続いて今回のような若い人材を多数選考していただきたい。

この度は貴重な経験をさせていただき有難うございました。今回提出した報告書が今後の交流に少しでもお役に立てば幸甚に存じます。】

学術交流報告書で、1996年当時を偲びましたが、その後長春を訪ねたことはありません。今では白求恩医科大学も中国聯誼医院もさぞかし様変わりしていることでしょう。

それでは、日本のトップアスリートたちの活躍を祈念して、今回の旅行記を終えます。

ガンバレ ニッポン！